

里子訪問ツアー その2

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン
理事長 マナダール マダープ ナラエン

ツアー参加者を見送りカトマンズに残った私は翌12日SLCに合格した里子たちと会った。今回、特別里親になってくれたダルマ氏も一緒だった。将来の目標や進学への意気込みを聞いたりした。



里子たちと交流

18日までのネパール滞在でカトマンズ周辺の変化を見ることができた。憲法制定が決まらず政治の遅れが著しい国内にあって、民間の活力や人々の向上心を至る所で感じた。しかし、まだまだ国全体の発展には遠く、政治や国としての目標が必要と感じた。



2車線の道路

アパートの建設

まず目を見張ったことに道路事情がある。空港からバクタプールに向かう幹線道路は日本からの援助で作られたこともあり中央分離帯がある片側2車線の立派なものだった。前は工事中で今回初めて通り、日本にいたようだった。カトマンズ中心部はそのままだが、市内ではあちこちで道路拡張の工事が行われていた。それに伴う立ち退きの問題も発生していて、大半が未解決のままである。

車も増えた。200%以上の関税にも関

わらず新車もよく見かけた。車やバイクのガラス張りショールームも見かけた。

そして各分野の建設ラッシュにも驚かされた。15、6階建てのマンションも既にあり、26階建てのマンションも建設中で、マンションブームと聞く。

外食産業の進出も著しい。ケンタッキーフライドチキン、ピザハット等々がある。外国との資本提携で作られたビールは10種類以上もあり、輸出もしている。

ネパールではWTO(世界貿易機関)に加盟している(2004年4月~)ので外国資本が入りやすい。

海外在住のネパール人からの投資も増えていて経済発展に寄与している。

カトマンズの人口増加に伴いショッピングモールも増えている。その中にはフードコートや映画館もあり、家族連れで賑わっている。昔を知る人には考えられないほどの変わりようである。

物価上昇は著しく貧富の差を生んでいる。大卒の平均給与は1万ルピー前後にも関わらず、ケンタの価格は日本と変わらない。

国の都市計画がまとまらないまま国の政策は待てず(待っていると何も始まらない)置き去りにされ、それぞれが走り始めている。

外国人は世界遺産の町に入る際は入場料を払う。カトマンズ700ルピー、バクタプール1,100ルピー、パタン600ルピーだ。そのため町の整備も進んでいるようだ。公衆トイレもできている。

カトマンズとポカラへ行く途中のクリンタルからマナカマナへの3kmをオーストリアの技術協力を得てネパールで初めてのケーブルカーが既にできている。258mから1,302mまでの高さを10分で到着する。往復475ルピーだ。

マナカマナのマナは心、カマナは希望

という意味がある。人々が願かけに訪れる人気の寺だ。



ケーブルカー マナカマナ寺院

ネパールとチベット国境を結ぶコダリ近くまで行った。この道は中国の支援で建設され、多くの中国製品がこの道を通りネパールに輸入される。今は商業道路ともなっている。また沿道には多くの有名な寺院や町があるので、観光客が多く訪れる。



バグパティ寺院 バグパティ女神

世界中を埋め尽くす中国製品はネパールでも例外ではない。カトマンズのニューロード近くに秋葉原を小さくしたような電気店街があり中国からのもので溢れている。ものによっては日本の1/10で買えるが、品質は定かでない。99ルピーショップがあり、ここも中国製品が中心である。プレゼントを贈り合う際も中国製品の交換になってしまっている。

しかし、まだまだネパールはインドとの結びつきが強い。鉄筋、燃料、農作物、医療品等々、あらゆる製品が輸入されている。個人消費商品は中国からのものより安い。ネパール・インド間はビザなしで行き来できることもあり、インド商人も増えてきているようだった。

ネパールは今、国の宗教を定めてはいないけれど、仏教、ヒンドゥ教、回教、キリスト教、その他、各宗教を尊重して

いる。しかし国民の多くはヒンドゥ教徒や仏教徒であるため、生活習慣はその宗教によるものが多い。最近ではチベット民族が盛んに仏教の寺院を建設しており、町の至る所に鮮やかな寺院が見受けられる。ネパールは釈迦の生誕地があり、チベット民族は大々的に仏教の教えを広めようとしている。今回、目玉寺院の裏にある丘に仏教寺院が出来ているのを見るのは初めてだった。祝祭日は人がとても多く訪れており、今や観光スポットの一つにもなっているようだ。



チベット仏塔 本堂

より良く生きるためのチャンスをもにしようという情熱を所々で感じた滞在でもあった。

ネパール滞在中、何度かダルマスタリ学校長、先生たちと学校のこれからについて話す機会があった。現在、学校は1年～10年生(小・中・高)まであり、文部省の方針としては2014年までに、10年生の高校までである学校に短大を組み込み10+2にすることにある。短大卒は日本の高卒に当たる。ミランダルマスタリ学校もそれに向けて準備を進めている。

18日、日本へ戻る当日に、現里子や元里子たちと交流を図った。そこで里子たちにはミランクラブの方針を伝えた。昨年からは1等級以上でSLCに合格した女子にだけ奨学金を出していること、学業終了後、職に就けた場合は次の世代へのために奨学金返還義務があることを説明し、理解してもらった。但し特別里親からの奨学金返済義務はないことは皆承知している。

こうして2週間のネパール滞在は新たな経験と将来への希望、お互いを支え合う幸せを感じて終了した。